

儀礼からみた中世後期の領主経済の構造と消費

田中浩司

The Structure of Manor Economy and Consumption Viewed from Rituals in the Later Middle Ages

- ① 研究史の概略と本稿の視角
- ② 京都龍翔寺の経済と開山二百年忌仏事
- ③ 京都大徳寺真珠庵の祖師年忌仏事
- ④ 室町殿の九条家御成
- ⑤ まとめ
- ⑥ 付論 中世後期の物価史料と若干の考察

【論文要旨】

本稿は、儀礼から日本中世後期の領主経済の構造と消費のあり方について考察するものである。

①では、寺社・公家、室町幕府の領主経済（財政）史を中心に、それに関連する流通経済史の研究動向を概観した。そこから、領主経済における消費の研究が手薄であること。領主経済と流通経済とを連関してとらえるためには、非日常的な儀礼をめぐる経済的な構造や影響についても追究する必要があること。室町殿を頂点とした権力・儀礼の体系が構築されてからは、各領主の単体ではなく、領主間の儀礼について同様な検討が必要であること、などを課題として提起した。

こうした視点に立って、②では、京都の禅宗寺院龍翔寺をとりあげ、龍翔寺開山の二百年忌仏事という儀礼が、当時の龍翔寺の年間経済をはるかに超える経済的な規模で執行されていたことを明らかにした。

③では、京都の大徳寺塔頭の真珠庵をとりあげ、一休宗純の年忌仏事が、一休に帰依した僧俗などの奉加・寄進によって経済的に支えられていることを明らかにし、同時に、そうした儀礼が大量消費をともなうものであったことを実証した。

④では、室町將軍足利義教の九条家への御成をとりあげ、その準備の様子、饗応などを詳細に検討し、こうした室町殿をめぐる儀礼が、奢侈的かつ大量消費の契機であることを指摘した。

以上から、中世後期の都市京都の経済は、日常的な領主経済のみならず、非日常的な儀礼にかかわる大量かつ奢侈的な消費によって支えられており、それが中世後期の都市的な消費の一つの特質であると論じた。

⑥付論として、本稿で分析対象とした寺院の帳簿類から、中世の物価史料を抽出し、それに若干の考察を加えた。